

『アイで包んでよ』

著：坂井朱生

ill：蓮川 愛

このところの篠島はため息をついているかと思えば、異常なくらいカリカリしてみせる。柚貴に対しても同様で、久保田や江坂がちょっとでも触れようものなら眉を吊りあげて怒鳴る。とにかく、著しいほどの情緒不安定ぶりだ。

触らぬ神に祟(たた)りなしとばかりに、このところの勉強会は篠島の目のとどかない場所、江坂の部屋で開かれていた。

連日夜遅く帰ってくる浩太郎は、ほとんど部屋へこもりきりだ。テーブルに残されてある夕食はきちんと食べているようだが、姿勢はめったにお目にかかれない。

「喧嘩したのかなあ、海ちゃんたち」

他に変わったこともなしとなれば、原因は他に考えられない。

「こんなの、僕もはじめてですよ。あの二人、このところぜんぜん顔をあわせてないでしょう。いつもたいていは名内さんが折れていたんですが」

「そうなの？」

「そうなんです。さて、どうしたものか」

「このままじゃ、胃が壊れちゃいますよ」

久保田が、あくまでこっそりと悲鳴をあげた。

「あんまり他人事に口を挟むのは不本意なのですが」

江坂が腕を組みつつ言った。浩太郎が聞いていれば嘘をつけ、と嚙(か)みつところだろう。

「江坂さん、でもなんとかならない？ だって海ちゃんがあのままだと、ずっと美味しいご飯食べられないよ。せっかく楽しみにしてたのに」

「名内さんに手を貸すのは気に入らないんですが、海さんが可哀想だし、さすがに俺の胃が限界です。これじゃ社食のほうはまだマシですよ」

「ですね。僕も自分の胃が可愛いので、ここはお節介しましょう。作戦会議はのちほど」

柚貴と久保田とは、一も二もなく頷いた。……のだが。

「ああ、でも」

「柚貴くん？」

「海ちゃん、人の言うこと聞くような人じゃないんだっけ。こっちがよけいなこと言ったら、もっと頑なになっちゃうなんてこと、ない、かなあ」

柚貴が肩を竦めて言った。

「そう、でしたね。僕としたことが胃の危機にばかり氣をとられて迂闊でした」

「うええ、それじゃ処置なし？」

久保田のふたたびの悲鳴に、柚貴と江坂も沈痛な表情をつくった。

「ですね」

「うん、たぶん」

八方ふさがり、である。

「とりあえず、胃薬の準備をしておきましょう」
誰かなんとかしてください。三人はがっくりと脱力した。

* * *

篠島の様子とやらをひととおり聞きおえた浩太郎は、はたと首を傾げた。
「そんなに不味かったか？」
「名内さんも疲れてるんじゃないですか。あれの味がわからないなら、相当キてますよ。あなたにだけひどい味ならともかく、僕らにだけひどいもの食べさせてあなたにまともな食事なんてのも、ありえませんか」
江坂がつけつけと言った。いつも以上に言葉じりがきつい。これはかなり恨みを買っているようだ。

食欲などあるはずがない。それでも篠島の料理を残すなどできず、毎晩、テーブルに用意されている浩太郎の分の夕食はきちんと平らげていた。

篠島の料理を味わうなどつらくて、味などわからないくらい一気にかきこんで喉へ流していたせいか、そこまでひどいとはわからなかった。

「僕の言ったこと、わかってなかったんでしょう。可哀想に、海さんはものすごくショック受けちゃってますよ」

俺が悪いんじゃないぞと叫びたいところだが、いかんせん相手が悪い。おまけに衆人環視のコーヒーショップ、会社からも至近ときている。

「いったいなにが原因だったんです。名内さんもそうそう怒るような人じゃないし、理由、あったんですよね」

言っているのかどうか迷う。ごくプライベートな話だし、彼らに話してどうなるものでもないだろう。浩太郎たちの関係を知っている江坂はともかく、久保田も柚貴もいる。

(いや、久保田は知ってるのか?)

とっちゃいますよとか言っていたし、最初からのあの態度だ。浩太郎は迷いつつ久保田をちらと見た。

「俺のこと気にしてんですか？ やだなあ、その件についてはまたご説明も一しあげますけど、今はまあ気にしないでどうぞ」

どういうことだ？

久保田は拗ねたように唇を尖らせている。その久保田を眺め、江坂が薄く笑った。
「僕も海ちゃんと浩太郎さんの話は、江坂さんから聞きました。邪魔しないようにって言われたから、ちゃんとおとなしくしてたのに」

柚貴が続く。こうして知らず知らずのうちにばれていくのだろうか。

喜んでいいやらみつともないやら、たかが喧嘩がずいぶんな大事になっている。

浩太郎にとってはもちろん『たかが』ではないけれど、篠島にはどうだろう。ここまで騒がれてはよけい、気に障るのではないのか。

「さあ、釈明をどうぞ」

有無を言わせない江坂に迫られ、浩太郎は重い口を開いた。

細かい話はしない。ただ旅行に誘って、一度は承知してくれたのに断られた。ごくごく簡単に、事実だけをうちあける。

「へーえ、そんなこと目論んでたんですか。俺たち放っておいて旅行ねえ」

「久保田くん、君は黙って」

「……はい」

茶々を入れてくる久保田を江坂が制した。

「やっぱり、僕が原因だったんだ」

柚貴は柚貴で、柔らかい面差しを歪めて俯(うつむ)いてしまう。

「いや。違——くもないけど、ええと、うん。結局は柚貴くんがどうこうじゃなくて、つまり」

どうしてか柚貴に悲しい顔をされると、浩太郎はひどく悪いことをしたような気にさせられる。

「違うでしょう。要するに名内さんはご自分が海さんにとってどれだけ大事なのかをぜんぜんわかっていなくて、海さんはわかってもらえているつもりで甘えすぎた、そんなところですかね」

「なんだよそれ」

嘆息まじりの江坂の声に、浩太郎は眉を顰めた。

「それを僕に説明しろと？ 莫迦ばかしい」

「海ちゃんは人に甘えるのが下手なんです。それと、口のききかたが最悪で」

江坂に代わって、柚貴が説明をはじめた。

「海ちゃんてすごい寂しがりなんです。小さいころ僕には海ちゃんがいたけど、海ちゃんのときは面倒みてくれる人も誰もいなかったから」

家事万端こなせるのも、一人でなにもかもできなくてはならなかったからだ。両親も姉も忙しく、誰も篠島の面倒をみてくれなかった。

「もちろん、家族みんなが海ちゃんを大好きです。でも、どうしようもないでしょ？ 忙しくて」

甘えかたなど教えてもらえなかった。だから、甘えられないならせめて、誰かに必要とされたかった。頼られたかった。そこにいていいと、必要なのだと言ってほしかった。

それが篠島が求めつづけていたことだ。だからあんなにも、下宿人たちのために働いている。

柚貴の言葉を江坂がときどき補足して、篠島の横顔が語られる。

(それで——、か？)

浩太郎があんなにも求めたから、篠島は応じてくれたのだろうか。恋愛感情はなくても、それが嬉しくて。

本文 p115～122 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>